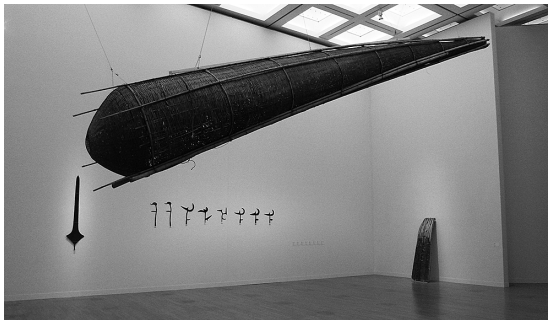
研究成果の公開――最近開催されたシンポジウムから



同時期に開催された国立新美術館での「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」の展示風景。この展覧会も、アートと人類学の架橋の試みとして、コロキアムの中で話題となった。

国際コロキアム

アートと人類学

日時：2014年5月19日（月）
場所：国立民族学博物館　第4セミナー室
主催：国立民族学博物館

マテリアリティ研究の進展に伴って、人類学とアートとの関係を見直す動きが活発化している。一方で、アートの世界では、「エスノグラフィック・ターン」などのフレーズのもと、芸術制作に人類学的手法を取り込む作家が増えつつある。現在は、人類学とアートの世界がかつてなく接近しているようにみうけられる。このコロキアムでは、ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館長のアンソニー・シェルトン氏をむかえ、人類学とアートの関係を改めて考察した。

シェルトン氏は、「芸術・人類学・人類学的想像力」と題する講演の中で、人類学はかつて文化の研究を独占していたが、カルチュラル・スタディーズやさまざまな批判理論の登場とともに、同じ問題系が多様な学問領域の間で共有されるようになり、人類学もひとつのディシプリンとしてではなく、あらゆる知的・創造的営みに要求される想像力、すなわち「人類学的想像力」の呼び名として重要になってきたという。それだけに、アートが人類学（的想像力）を求めるようになるのは必然であり、旧来の美術史学と人類学、美術館と博物館の区別を超えて、両者を架橋する営みが進んでいることを指摘した。海外から参加したディスカッサントも含めて、アートと人類学の関係についての最新の研究動向を確認する機会となった。

第15回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会

文化遺産管理における住民参加

日時：2014年6月26日（木）
場所：東京文化財研究所 セミナー室（地階）
日時：2014年6月27日（金）
場所：大阪国際交流センター　小ホール
主催：文化遺産国際協力コンソーシアム
国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学」
科学研究費補助金（基盤研究(S)）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」

今日のグローバル化は、世界を均質化させるばかりでなく、逆に、各国、各地域の文化的特徴を強調する方向にも作用してきた。なかでも地球規模の情報システムや移動手段の発達は、地域や民族が誇りとする文化遺産への関心を高めることに繋がり、文化遺産は保護されるものではなく、観光の対象として注目を浴びるようになった。それは、国威発揚と高い経済効果をもたらしたが、一方で市場経済の急激な導入による、周辺環境の悪化を招くなど、負の面ももたらした。

この反省点に立ち、今日では、文化遺産保護だけを扱う旧来の方針を見直し、地域社会を巻き込んだ社会政策の中に文化遺産を位置づける動きが世界各地で活発化している。地域社会の参加は、観光に関わる富の偏在を解消する方向へと働き、さらに地域の宝として文化遺産を維持していく機運を生み出すという見通しからである。

2日間に渡る本研究会では、関雄二（国立民族学博物館）、八百板季穂（北海道大学）、西山徳明（北海道大学）、松田陽（イーストアングリア大学）、益田兼房（文化財建造物保存技術教会）らが、ペルー、フィジーおよびミクロネシアやイギリス、イタリアなど様々な地域における、地域社会の参加を促す国際協力の事例を紹介し、今後の文化遺産管理のあり方を考える機会となった。

機関研究「マテリアリティの人間学」領域「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

公開フォーラム
ユネスコ無形文化遺産登録記念

和食は誰のものか？

日時：2014年6月28日（土）
場所：国立民族学博物館　講堂
主催：追手門学院大学地域文化創造機構
機関研究「文化復興と芸術創造に関する総合的研究」
国立民族学博物館

基調講演では、「『和食』文化の保護・継承 国民会議」会長から、ユネスコ無形文化遺産に和食が登録される経緯と、それまでの和食の大まかな歴史をまとめてもらった。個別報告では、料亭、家族、地域振興という3つの場において和食が抱える課題と、無形文化遺産制度に対する期待を述べてもらった。いずれにおいても、課題や期待は和食の定義によって変わりうるが、ユネスコへの提案書だけでは、和食の範囲は一義的に決められないという指摘もされた。ただし、多くの担い手がそのことを議論できるなら、和食のよりよい未来を模索できる可能性もある。

ひき続いておこなわれた総合討論では、あらためて無形文化遺産としての和食の範囲が問題とされた。ユネスコへの提案書では、北は北海道から南は沖縄（八重山）の料理まで、多様な郷土料理が和食に含まれている。このことが意味するのは、伝統を尊重する素朴な態度が、安易なナショナリズムに回収される危険性である。しかし逆に、和食という単一の枠組みのもとで、多様なグループが互いを認めあうようになる可能性もある。こうした未来を実現するには、和食に関わる個々人がそれぞれの文化的背景を見なおし、文化的背景を異にする人たちの課題も理解できるよう、諸条件を整えていくことが望ましい。